

## 「これからの公共建築」

建築デザイン学科 豊嶋柊太

私が感動した建築は愛媛県にある今治市伊東豊雄建築ミュージアムである。この建築は伊東豊雄が設計したミュージアムであり、2011年に愛媛県今治市大三島町に設計された。私は、伊東豊雄の思想をより知りたいと考えこの建築を訪れた。

伊東豊雄はこの建築について、かつて訪れたことのないこの島に足を踏み入れた途端、島の美しさと島の持つ不思議な力に圧倒され、地霊の存在が伝わってくるような土地の潜在力を感じたと述べている。今治は巨匠丹下健三の出身地でその土地に伊東豊雄の建築ミュージアムが建てられた。また、自邸として1984年に東京中野に実現した「シルバーハット」もこの地で再生された。場所が建築家によって継承されていくことが実体として感じることができる。また、今治は私の祖父母の家があり私もこの地で建築家とつながっていると感じた。建築が場所をつなげていると感じ感動した。

この建築は、ひときわ夕陽が美しい瀬戸内海・大三島南西部の海を望むみかん畑の斜面に計画された。伊東豊雄の作品を展示するスティールハットと、ワークショップ等の活動を行う伊東豊雄の旧自邸を再生したシルバーハットの2棟で構成されるミュージアムである。海と山という自然に建築という人工物が混ざりあっている。

スティールハットは、尾根と谷を含む敷地の尾根の部分に位置している。設計の初期段階では、景色を邪魔しないように起状に富んだ地形との関係性から生成される建築を構想されていたが、最終的にはあえて周辺の地形とは関係のない自立した彫刻的な幾何学が持ち込まれた。この幾何学は、一辺3mの4種の多面体を隙間なく結合することが可能である。多面体はいずれも面が二種類の角度の傾斜となっており、屋根、壁、床の区別がない。見る角度によってさまざまな形を見せる。

建物内も壁が斜めになっている。そのため、空間が球体の内部にいるかのような求心性を帯びると同時に、歩を進めるとパノラマ的に壁面が展開していく。正六角形の床から傾斜した壁が立ちあがっており、青く塗装された壁には、瀬戸内海の島々と伊東豊雄のこれまでの建築模型や「建築とは何か」をテーマにさまざまな分野の人から寄せられたメッセージが書かれている。また、大三島についての展示や世界中の建築家や学生、子どもたちから募り集められた「みんなの家」のスケッチも展示されている。床にクッションが置かれているルームもあり、くつろぎながら閲覧することができるようになっており、ゆっくりとした時間を過ごすことができる。斜面にできているため、階段を降りた先の部屋も外の景色が目に入ってくる。入り口のある2階は少し閉鎖的であるが扉がなく、つながっていることで開放的に感じる。そして、壁に展示物があり、壁に沿いながら建物内をまわることができる。1階は海方面がガラス張りで開放的な空間である。また、天井高も高く壁が中央に向かって傾斜して並んでおり、高さをより感じることもできる吹き抜け空間がある。不思議な感覚にいながらミュージアムを周り、いろんな感情が生まれる。

シルバーハットは、敷地の谷側の見晴らしがよい部分に位置する。構造は旧伊東豊雄自邸

と同様に3.6m間隔のコンクリート柱にかかる梁に、菱形フレームからなるアーチ状の屋根が架け渡されている。金属のかまぼこ状の屋根が連なっており、内部は大部分が屋根のみがかかった半屋外空間となっている。都会でも自然の空気を感じながら集うことを意識した伊東豊雄の設計を感じることができる。また、図書閲覧スペースもあり、伊東豊雄が手がけてきた数々の作品の図面、資料や模型を見ることができ、伊東豊雄をより感じることができる。

建築の幾何学が持つ硬さに対して、完結性の強い多面体の中が液体に満たされ、模型や言葉、スケッチが流動しているような展示がされている。今後、この建築内部の模型や言葉は、さまざまな人の手が加わって、さらに増え続けていく。

この建築は自由であると感じた。アプローチ部分からこの建築を見るとどんな建物でどんな思想でつくられたのかワクワクする。この瀬戸内海が見渡せる場所に設計され、周辺の地形とは自立した建物が自由さを感じさせる。建物の外観は独特な幾何学をしているが、内部には大三島の人たちや世界中の学生や子供たちのメッセージやスケッチなどが天井や壁にランダムに配置されている。外部には独自性があり、内部は協調性があり、たくさんの人によって建築が出来上がっている。私が「建築は周りにつくられ、周りをつくる」と考えるきっかけとなった建築である。建築は、場所があることで成り立つ。そして、建築ができることで新しい場所ができる。伊東豊雄は公共建築について、「利用者にとって望ましい建築とは、毎日でも行きたくなる建築である。毎日でも行きたくなるのは、行くのが楽しい建築、居心地の良い建築だからです。」と述べている。自然の中にある建築だからこそ、「時」によって景色を変え、内部はリラックスすることができる公共建築をより感じることができた。このように建築が人と触れ合うことによってより建築となるような建築を設計できるようになりたい。



外観のようす



中からの様子